

## 6. 思いやり

愛は、家庭で教わらなかつたら  
よそで学ぶのはムズカシイ。



- ピンチのときこそ、家族の絆きずなが試される。
- 子どもは親の姿を見て学んでいく。
- 人からもらう幸せだけでなく、人のためにできる幸せもある。
- みんなそれぞれが世界でたった一つの命なんだ。
- いちばんすてきな本は、お父さん・お母さんの声で読む本だ。
- だれもがよりよく生きようとしている。
- 人を差別するような子にはなってほしくない。

# ピンチのときこそ、 きずな 家族の絆が試される。



子どもが、人を思いやり、豊かな人間関係を築いていくためには、まず、思いやりのある関係を家族でつくるのが大切です。子どもが自らの生活する世界を広げていくためにも、家族のいたわりや思いやりが必要でしょう。

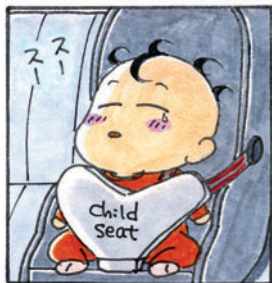
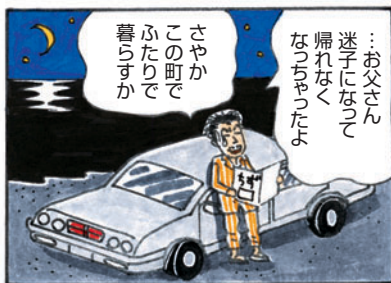
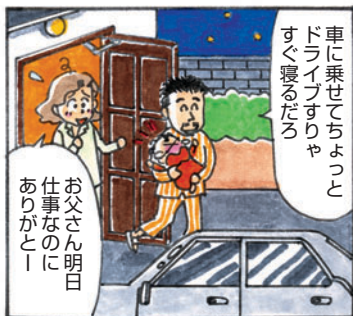
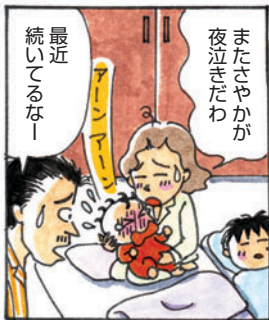
また、夫婦や親子の間で、日ごろからいたわりの言葉を交わすことが大切です。特に悩みや葛藤かっとうに直面したときに、いたわり、慰めることが、困難に立ち向かう勇気や力をはぐくみます。さらには、人との友好的な関係を築く力をはぐくむことにもつながるでしょう。



**まず、家族で思いやる**



# 本和加家の場合



# 子どもは親の姿を見て 学んでいく。



親に感謝し、親を思いやる心は、広く他人を思いやる心の基となる大切なものです。まず親が自らの親である祖父母を大切にしている姿を見せることを心がけましょう。

大人たちは、自らの親への接し方や、思いやりのある社会のために何が必要かについて、子ども自身から問われているのだということを考えましょう。



**親が率先して祖父母を大切にす**



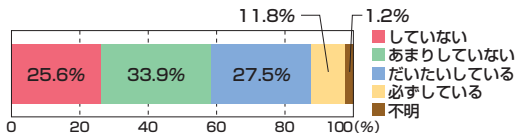
# 人からもらう幸せだけでなく、 人のためにできる幸せもある。



「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」を小・中学生の60%は「していない」「あまりしていない」と答えています。人を思いやり、行動する愛情や勇気をもった人に育てるために何ができるでしょう。

思いやりの心は、幼少のころからの日常における実践を通してはぐくまれます。まず親が率先してやってみせながら、子どもたちが自然に妊婦や高齢者に席を譲ったり、障害のある人などが困っているときに声をかけたりすることができるようにしつけを行うことが大切です。

## バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること



(注) 全国の公立小学校2・4・6年生、中学校2年生、高校2年生約26,000人を対象に調査  
資料：「『青少年の自然体験活動等に関する実態調査』報告書」  
平成18年・独立行政法人国立青少年教育振興機構

## 親が率先して人助けをする

# みんなそれぞれが世界で たった一つの命なんだ。



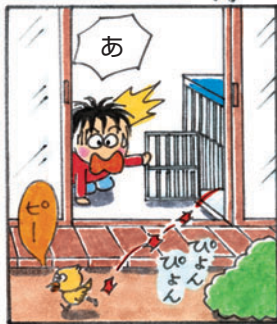
身近な人の死を目の当たりにすることが少なくなったり、殺人を繰り返すテレビやゲームなどで虚構の死に慣れたりして、命の重さやかけがえのなさを感じにくくなっています。

自然の中で遊ばせたり、動物や草花を大切に育てたりするなど、さまざまな生き物とその死にふれる機会を意識的に用意し、子どもに生命の尊さや大切さを実感させましょう。

また、亡くなった人の家族や傷つけられた人の気持ちを想像させるなど、その悲しみがどんなに深いものかを理解させましょう。

**子どもに命の大切さを実感させる**

ほんわか  
本和加家の場合



# いちばんすてきな本は、 お父さん・お母さんの声で読む本だ。

親のぬくもりを感じながら優れた絵本に接し、一緒に共感し合うひときは、子どもの感性や心を豊かにする貴重な時間になります。

食事の時間のように「本の時間」を設けるなど工夫して、少ない時間でもいいから毎日本を読み聞かせたり、親子で一緒に図書館へ行く、読み聞かせ会に参加するなど、小さいころから本に親しむ環境づくりを心がけましょう。

ただし、早くから難しい本を読ませるのは子どもの心にストレスを与え、かえって本嫌いにさせかねないので、控えましょう。



**親が本を読んで聞かせる**





# だれもがよりよく 生きようとしている。



見えにくい、聞こえにくい、うまく話せない、発達に遅れがある、身体が不自由であるなどの障害がある子どもたちがいます。

障害がある子もない子も皆、よりよく生きたいと願っている「大切な仲間」です。

障害があっても社会で活躍している人がいることなど、日頃から家庭の中で子どもに話していきましょう。

**障害がある人もない人も大切な仲間であると教える**

# 人を差別するような子には なってほしくない。



親は、子どもがいじめに加わったり、他人を差別し傷つけていることに気づいたときには、それが人間として恥ずかしい行いであることを教える責任があります。

その際、理屈であれこれ言うより、子どもを愛していること、すてきな人に育ててほしいこと、弱い者をいじめたり差別したりするのを見てショックだったこと、人が傷つくのを喜ぶことに怒りを感じたこと、二度としてほしくないこと、など親としてのほんとうの気持ちを伝える努力をしましょう。

また、まず親自身が偏見をもたず、差別をしない、許さないということを、子どもたちに示していくことが大切です。

**差別をしない偏見をもたない子に育てる**